

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4093200188		
法人名	株式会社ウェルフェアネット		
事業所名	さわやかテラス大野城中央	(ユニット名	1階)
所在地	福岡県大野城市中央2丁目5番19号		
自己評価作成日	令和2年11月4日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益社団法人福岡県介護福祉士会		
所在地	福岡市博多区博多駅東1-1-16第2高田ビル2階		
訪問調査日	令和2年11月27日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「あるがままに 楽しく ゆったりと」を家訓とし、その人らしく生活して頂けるよう、その方お一人お一人の想いや家族の希望を把握し、想いにそった暮らしの実現に取り組んでいます。また小規模多機能型居宅介護施設「さわやか憩いの家大野城中央」と併設しており、廊下でつながっているため、入居者・スタッフともに行き来があり、協力体制がとれている。開設して9年が過ぎ地域運営推進会議や行事を通して、地域の方々への理解が深まっていることが実感できる。地域への認知症啓発活動にも力を入れており、地域に根付いた事業となれるよう取り組んでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

近隣に公園や学校、マンションが多く建つ住宅地の一角に木造二階建ての事業所がある。事業所内は明るく、木の温もりと清潔感がある。利用者が考えた「あるがままに 楽しく ゆったりと」を家訓とし、利用者は穏やかに過ごしている。酒・たばこなどの嗜好品も主治医と相談のうえ、利用者の希望に沿うようにしている。職員も「スタッフ心得」を日々念頭に、利用者寄り添いながら関わっている。若年性認知症当事者の相談を受け入れ、当事業所のボランティアからスタートし、現在、系列事業所での雇用に至っている。職員は一人ひとりの事情に合わせ、勤務形態の選択が可能であり、働きやすい環境である。事業所は福祉避難場所にもなっており、災害時、複数の地域住民の受け入れを行った事例がある。今後益々、地域福祉の拠点としての役割が期待される事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27) ○	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21) ○
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,38) ○	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22) ○
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40) ○	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39) ○	68	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12) ○
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51) ○	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごさせている (参考項目:32,33) ○	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○
64	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:30) ○		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	新型コロナウイルスの影響で書面での開催になっているが、毎月のカンファレンスで理念、家訓、スタッフの心得の唱和を行いスタッフ全員で共有しながら実践につなげている。	利用者の考えた「あるがままに 楽しく ゆったりと」を家訓とし、法人の理念を事業所理念としている。行動指針を具体化した「スタッフの心得」を日々振り返りながら、ケアの在り方を職員同士で確認したり、先輩職員にアドバイスを貰うなど、意識しながら利用者に接している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	毎年、入居者の方と一緒に地域の行事に参加している。今年は新型コロナウイルスの影響で、地域行事が中止されることが多く、交流の地域行事への参加はできていない。	自治会主催の餅つきやどんど焼き、町内一斉清掃にも職員は利用者と共に参加している。利用者は以前住んでいた地域の敬老会に自治会を通じて参加することもあり、地域交流に努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	新型コロナウイルスの影響で取り組みはできていない。書面での開催になっているが、地域運営推進会議や広報誌を発行し地域に向けて認知症の理解、支援について発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	新型コロナウイルスの影響で2ヶ月に1回、書面での開催となっているが、区長や民生委員など地域の方を交えて行っており、意見を日々のケアに活かせるようにしていた。	市職員や社会福祉協議会、民生委員や全ての利用者家族など書類を郵送し意見、感想など貰っている。行事や現状、ヒヤリハット、外部評価などの報告を行い、議事録は全ての参加者、家族に送付している。その中で、参加者よりヒヤリハットが続いている為、対策をとる意見があり、全職員間で検討するなどサービス向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の担当者とは日頃から連絡を取っている。大野城市地域密着型事業所の情報交換会にも参加し、事業所の現状や相談・勉強会も行え協力体制が築けている。	介護保険制度の事務的な内容についてやコロナの陽性の疑いのある利用者の受け入れなど、不明な点は市担当者に相談している。また、市の担当窓口を通じて出前講座(権利擁護に関する研修)を依頼するなど協力関係を築くように取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービスにおける禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	スタッフの心得や身体拘束適正化に基づき鍵をかけないケア、言葉、薬(向精神薬)による抑制をしないよう取り組んでいる。身体拘束廃止委員会を設置し、拘束に当たる内容については情報の共有を行っている。	身体拘束に当たる具体的な行為について職員は理解している。事業所内に身体拘束適正化委員会を設け、毎月適正に行われているか話し合い、職員に周知している。不適切な対応を見つけた場合には、管理者によるアドバイスや職員同士で注意意識を高めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	外部や社内の研修で虐待について学ぶ機会がある。研修を受けたスタッフは発表を行い、スタッフ間で共有している。身体拘束廃止委員会や身体拘束適正化にて話し合いを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	毎年、カンファレンス時に外部講師を招き成年後見制度・権利擁護について学ぶ機会がある。現在お一人の方が成年後見人制度を利用されている。	毎年、年度末に外部講師に依頼して、権利擁護に関する研修を行っている。職員は研修報告書を作成し、当日参加できなかった職員はビデオにて研修している。玄関には情報提供の為、パンフレットの準備がある。成年後見制度を利用している利用者はいるものの、すべての職員が制度を理解するまでに至っていない。	権利擁護に関する制度の理解はすべての職員がより深められるように期待したい。
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	責任者が契約前に書面にて、契約内容を掲示し説明を行っている。疑問点や法改定に伴う変更がある時にはその都度、面談や連絡を行い説明している。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に1回家族面談と家族会を行い責任者と話す機会を設けている。日頃からスタッフ全員が家族ともコミュニケーションを密にとり、家族からの意見・要望をやりとりシートに残し情報を共有、対応を行っている。	管理者・職員は利用者や家族が話しかけやすい雰囲気づくりを心掛けている。新型コロナウイルスの影響で家族会は行わず、家族面談を実施した。その中で、訪問マッサージを再開して欲しいとの要望があり、12月から再開予定である。その旨、家族に報告している。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	責任者との面談の機会が設けられている。チーム会議、カンファレンスは意見を言いやすい雰囲気である。必要なケアはすぐに職場に取り入れられている。	責任者・補佐は職員が話しやすい雰囲気である。尿取りパットのサイズ変更や、むせやすい方にトロミをつけるなど、職員からの意見をケアに反映させている。また、異動についても相談しやすい雰囲気である。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	キャリアパス制度やスタッフ1人ひとりに合わせた勤務形態で働くことができる環境が整っている。年に1回のリフレッシュ休暇や産休、育休、介護休暇もとりやすい環境が整っている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮し生き活きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保障されるよう配慮している	スタッフの採用に関しては性別や年齢で判断せず、働く意欲や人柄を重視している。定年は60歳だが、希望があれば65歳までの再雇用も可能である。自己研鑽による研修や資格取得の際は勤務調整している。	希望する勤務形態での働き方が可能であり、希望休暇も取りやすい。職員は持てる能力を発揮し、生き活きと勤務している。「寄り添い目標シート」に職員自身の年間目標を立て働いており、資格取得やスキルアップの為の配慮がなされている。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	権利擁護の研修を行っている。さん付け呼称で呼ぶこと、生き方や人生歴を意識した行動をすることを日々伝えている。	管理者は、市主催の人権研修に参加している。職員は利用者を尊重しながら日々関わっている。不適切な対応を見受けた場合には、管理者はアドバイスしたり、職員同士でも注意し合っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の経験年数などに応じて社内研修を行い、人材育成に取り組んでいる。新人スタッフには新人研修年間プログラムに沿って研修を行っている。寄りそい目標シートを活用し目標に向かって取り組んでいる。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	大野城市地域密着型サービス事業所情報交換会や福岡県高齢者GH協議会等の研修や災害広域相互交換協定にて災害時の連携体制を深めている。リモートを活用しながら研修や勉強会に参加し他施設との交流、サービスの向上に努めている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に本人、家族、ケアマネージャーから情報収集を行い、好まれることや生活環境について気づいたことは気づきシートに記入し活用している。 日頃から入居者の話に耳を傾けることを意識して関わっている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族とのやりとりの中で知り得た想いや要望はやりとりシートに残し情報の共有を行っている。来訪された時には笑顔で挨拶やお茶を出した時に会話をし、話しやすい雰囲気づくりに努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前情報を参考にしながら日常の様子を観察し、必要な支援を判断している。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	何事も入居者の方と一緒にいることを基本とし、できること好まれることを把握して関わりを行っている。		
21		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日々の生活を記録でお伝えし、毎月郵送している。来訪時にはその日の様子や日常の様子を口頭でお伝えしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	新型コロナウイルスのため感染防止対策を行いながら、自宅近くや馴染みの場所へのドライブに行っている。	利用者の自宅前をドライブしたり、馴染みの美容室へ職員が同行したりしている。また、利用者が携帯電話を使用する際には手伝うなど、馴染みの人や場所との関係が途切れないように支援している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一人ひとりの個性を大切にしながら入居者同士の関係性を把握し、スタッフが間に入りコミュニケーションが取れるように配慮している。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	定期的に広報誌を送るなど契約終了後も関係性が途切れないようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	以前の生活歴を踏まえながら、その時々々の想いに寄り添い、できるだけ希望が叶うように努めている。また、記録に残し、スタッフ間で情報を共有している。	家族に生活歴や利用者の好みなどの情報を聞きとり記録に残している。又、入浴時など個別で対応する際、会話の中から思いをくみ取って日常記録に残し、職員間で共有している。化粧の好きな利用者には毎日化粧をしたり、マニキュアなどして利用者の思いを実現している。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族、サービスを利用していた事業所から以前の生活歴や情報を聞き取り記録している。また、新しい情報は追加し全スタッフで情報を共有している。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の暮らしを細目に記録している。状態の変化や必要なことは日報に記載し申し送りなどで伝え、全スタッフが情報を把握できるようにしている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者の変化やスタッフの気付きを基にケアプランを作成している。ケアプランチームで検討し全スタッフでカンファレンス時に話し合い、現状にあったケアプランを作成している。家族には来訪時に現状の説明をしている。	利用者1～2名を職員が担当し、チーム会議で介護計画書の原案を作成し、月1度のカンファレンスで検討している。介護計画を毎月評価し、3ヶ月に1度見直しを行っている。家族の意向は訪問時に聞き取り、主治医にはその都度確認を行っている。状態に変化があれば、その都度見直しを行い、現状に即した介護計画を作成している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケアプランに関する事、体調、日々の暮らし、ヒヤリハットをそれぞれ色を変え記録に残している。毎月のモニタリングを基にチーム会議を開きケアプランを見直している。変更事項はいつでも確認できるように、日常記録と一緒に保管している。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の希望に添っている。訪問マッサージ、訪問歯科など、その時々必要なサービスを相談しながら、ニーズに合わせた対応をしている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源を把握し、一人一人の関りを重視している。事業所の近くに公園があり散歩や外気浴をされ、地域の方々との交流の場にもなっている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時にかかりつけ医の説明を行い、月2回の訪問診療や訪問看護との連携体制がある。体調に変化がある時はドクターに連絡し、状態に応じて受診している。また、訪問歯科とも連携を取っている。	本人及び家族の希望により、全利用者が事業所協力医をかかりつけ医としている。月2回の訪問診療があり、また、法人内の看護師が毎週体調管理をしている。他科受診には職員が同行したり、家族が送迎して診察を受けている。週に1回歯科衛生士の訪問があり、歯科治療が必要な利用者は診察を受けている。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設の憩いの家の看護スタッフとは日頃から情報を共有し、体調に変化がある時は相談し、適切な対応ができる体制にある。また、必要に応じかかりつけ医の指示のもと、訪問看護ステーションに対応してもらっている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は毎日お見舞いに行っている。(コロナ禍においては受け入れ体制がある病院のみ) 家族、病院スタッフとの情報共有に連絡ノートを活用している。かかりつけ医には随時情報を報告し、退院後はスムーズに元の生活が送れるようにしている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時から終末期ケアを行っていることに触れ、定期的に本人、家族の意向を確認している。ドクター、訪問看護師、職員がチームとなり、本人や家族が望む終末期を迎えられるように深めている。	今年度も看取りを行っており、看取りケアについて職員は理解している。利用者の重度化や終末期には、かかりつけ医より家族に説明があり、本人、家族が望む看取りの介護計画書を作成している。家族が望めば付き添い、宿泊することもできる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルを作成し、入居者の急変や事故発生時に備え、救急救命の外部講習や事業所内での講習を受ける機会がある。学んだ事はカンファレンスで実践を交え、情報を共有している。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	非常災害対策計画に基づいて、訓練を行っている。長期保存可能な備蓄、避難時に必要な個人情報等の持ち出しも職員は周知している。9月の台風では同事業内で2名の地域の方を受け入れ支援、協力に努めている。	防火管理者のもと防災訓練を6月に実施し、次は来年1～2月頃を予定している。火災報知器、スプリンクラー、消火器を2ヶ所に設置し、点検書に基づき毎日確認を行っている。非常持ち出し袋、備蓄があり、消費期限を管理している。近隣のマンションへ訓練実施案内の掲示はしており、新型コロナウイルスの影響も考えられるが、地域住民の参加にまで至っていない。	スムーズな避難誘導に備え、防災訓練の時から地域住民の参加が望まれる。訓練への参加と協力体制のあり方については、引き続きの検討の機会を持つことを期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	さん付け呼称を徹底している。何かをする時は事前に声掛けし、了解を得てから行うようにしている。トイレの声掛けには特に注意し、さりげなく案内するように心がけている。入浴時に関しても特にプライバシーに気を付けている。	利用者を常に尊重し、呼称は「さん」づけて声掛けすることを心掛けている。排泄介助はプライバシーを損ねない声掛けを行っている。日中は、外部からの視線を防ぐためにベット周りをレースのカーテンで囲みプライバシーの確保に努めている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	何事も自己決定できるように、声掛けに工夫している。普段の何気ない会話や表情から、思いや希望を引出せるように働きかけている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	スケジュールは決めず、一人ひとりのペースを大切に過ごせるように心がけている。何か行う前には必ず本人への意思の確認をしている。入居者優先であることを常に全スタッフが意識している。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入居前から使用されていた物を持参され、好みの物を身につけられている。馴染みの理・美容院に定期的に通われている方もおられ、その方らしいおしゃれを楽しまれている。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事が楽しみとなるよう、旬の食材やそれぞれの好みや季節ごとの行事に合わせ、献立に取り入れている。食材切り、味付け等、一人ひとり出来ることをスタッフと一緒にやっている。	職員が毎日のメニュー作りを考え、食材の買い物をしていく。陶器の食器を使用し、利用者が食器を洗ったり、食材を切ったりと家庭的な雰囲気の中で準備をしている。誕生会のケーキを利用者と一緒にデコレーションしたり、おやつ作りをして食事を楽しむことが出来るように工夫されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事、水分の摂取量を一人ひとり記録している。状態や力に合わせ柔らかくしたり、刻み、とろみをつけている。摂取量が少ない時は好まれる物を提供している。嚥下機能が低下している方には、ゼリー等を提供し脱水予防に気を付けている。栄養スクリーニングを行い栄養状態に気掛けている。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後本人の力に応じた口腔ケアを行っている。家族が希望され、週1回の歯科訪問（ブラッシングケア）を受けられる方もいる。歯の痛みや歯茎の腫れ、義歯の不具合がある時は医師に相談し早目の対応ができています。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄リズムを把握し、その方に合ったタイミングで声掛けをしている。紙パンツを使用されている方もトイレでの排泄を基本としている。状態に合わせて、紙パンツから布パンツへの検討を行っている。	職員は、利用者一人ひとりの排泄間隔をチェック表にて把握しており、トイレでの排泄を大切にしている。日中はリハビリパンツとパットを使用し、トイレ誘導を行い、オムツを使用することなく、排泄の自立に向けた支援に取り組んでいる。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄のチェックを行い便秘気味の方には、食事からのアプローチを行っている。乳製品やプルーンなどを提供し、個々に応じた予防の取り組んでいる。また、便意がある時は腹部マッサージを行い、姿勢に気を付けスムーズな排便を促している。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴時間や曜日の設定をすることなく自宅と同じように、希望の時間に入浴ができるようにしている。季節の風習で菖蒲や柚子を入れ、入浴を楽しんでもらえるようにしている。	日々、入浴の準備はできており、利用者の希望に沿って毎日の入浴は可能である。入浴は個々に対応し、入浴を拒まれる場合は同性での介護や時間をずらしたり、翌日に変更したりしている。入浴剤を使用し、浴室に香りを漂わせ、気持ち良く入浴できるように支援している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	これまでの習慣、生活習慣が崩れないように配慮している。心地よく休まれるように室温、音や明るさに気を付けている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬中の薬は、その都度頂いている詳細表と一緒に保管し、すぐに確認できるようにしているようにしている。体調の変化や処方薬に変更があった場合は個人記録に記載し、全スタッフで共有できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの生活歴や能力を活かせるようにケアプランを作成し、張り合いや楽しく日々を過ごせるように努めている。		
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	希望に添い、いつでも出掛けるようにしている。新型コロナウイルス感染症の影響で散歩やドライブ以外の外出が難しくなっている。	日頃は近所への散歩や公園までの外出をしている。新型コロナウイルスの為、外出の頻度は少なくなったが、事業所が学校に隣接しているため、事業所の敷地から学校のさくらをみたり、こすもすを見に外出している。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	希望に応じてお金を持たれている方もいる。管理が難しい方は、家族や後見人に相談してお預かりしている。預り金の中から自由に買物ができている。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があればいつでもかけることができる。かけることが難しく方はスタッフが取り次いでいる。携帯電話を持たれる方もおられ、家族との会話を楽しみにされている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	整理整頓を心がけ、安心できる空間作りをしている。空調の調整を細目にし、足音や話し声に配慮している。また、生活音も大事にしている。	共用部分の広々としたリビング兼食堂は適度な明るさと清潔感がある。オープンキッチンの為、調理の様子や食事のにおいも漂うことで、家庭的な雰囲気である。廊下には月ごとの行事の写真が掲示され、利用者の日常生活を知ることができ、居心地よく過ごせる工夫がなされている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファやテーブルの配置、食席は入居者と一緒に考え、それぞれの居場所を大切にされている。併設の憩いの家への行き来も自由にでき、思い思いの場所で過ごされている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた物や好みの物を持参され、本人と家族の意向を取り入れた部屋作りになっている。手すり、ベッドの位置など、身体能力に応じた配置になっている。	居室に備え付きのベッドは、利用者の希望に合わせた配置となっている。布団類は利用者が使い慣れた物を使っている。家具やテレビ、家族の写真など馴染みの物を持ち込み、適度な室温の調整もなされており、居心地よく過ごせるように工夫している。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの状態に合わせ、手すりの位置や高さ、家具の配置など工夫している。できるだけご自分の足で歩いて頂くように声を掛けしお手伝いしている。		